

「高度な知の創成と的確な知の継承」——。岡山大学の理念のもとに教育・研究を展開する個性あふれる教員たち。研究室を訪ねる。

被災地に「薬難民」

分野開設を大きく後押ししたのは、2011年の東日本大震災だった。それまでも医療教育統合開発センターを中心に医・歯・薬学が協力して医療教育を推進しており、5年前にセンターに赴任した名倉教授も薬剤師としての臨床実務経験を持つ研究者として、救急現場で薬剤師の役割を模索していた。学内救急ワーキングチームで国内外の研修に参加するなど、同研究科(医)の氏家長人教授らと救急医療チーム作りを目指していたところ、大震災が発生。岡山大学病院からボランティアとして被災地に派遣された名倉教授は「多くの「薬難民」を目の当たりにし、薬剤師は緊急時にこそ専門能力を発揮すべきだと実感した」と振り返る。カルテやお薬手帳がなく日ごろ飲んでいた薬が分からない患者、支援助資として届けられた医薬品を仕分けしないと使えない状況……。薬剤師が圧倒的に足りなかった。

元々薬学部でも臨床に即した教育研究分野が必要との認識があり、震災後の社会の要請もあって、新分野開設はごく自然の流れであった。

# チーム医療の要 救急に強い薬剤師育てる

東日本大震災を機に、救急時や災害時の医療現場における薬剤師の必要性に注目が集まっている。人材育成が求められる中、2012年3月、薬学部全国初となる「救急薬学分野」が開設された。開設時から中心となり指導にあたるのが、医歯薬学総合研究科薬学系の名倉弘哲教授。学生とともに臨床現場の最前線に立ち、新たな薬剤師像を岡山から発信している。



▲災害に備えヘリコプター搭乗訓練を行う名倉教授(右)

学生も医療現場体験

「これまで薬剤師は人の生死に関わる場に直接関わってこなかった。チーム医療が求められる中、薬剤師のフォローはますます重要」と名倉教授は言う。医師の指示を待つだけでなく、積極的に医療に関わる「薬のプロ」としての自負がにじむ。分野の研究内容は、薬物治療の患者の予後改善、感染症予防のための効果的な抗生物質の使い方など、臨床現場での対応が中心。現在は4〜6年の学生7人が研究室に所属。4年生は「医療における薬剤師の責任を感じてほしい」との思いから、岡山大学病院高度救命救急センターで医療現場を間近に見て、薬剤師の専門領域を学ぶ。5、6年生は、出血性ショックなど人によって経過が異なる症状に対し、実際の投薬や過去のデータから根拠のある最適な治療法を探る研究などに熱心に取り組んでいる。今後は日本臨床救急医学会が本年度認定を始めた「救急認定薬剤師」の取得も目指す。

災害への備え緩めず

全国初の救急薬学分野として

全国から見学希望も相次ぐ。薬局が在宅医療を支える動きも広まっていることから、現役薬剤師からの問い合わせも多い。注目が集まる時だからこそ、名倉教授は災害への備えを緩めない。岡山大学病院や岡山市消防局の災害訓練に学生とともに参加するほか、病院の医師・看護師・薬剤師でつくる医療チーム「DMAT」承認に向け活動している。「災害が少ない岡山だから人材育成に向いている。岡山大学卒の薬剤師は救急・災害に強い、と思ってもらえるような人材を全国に輩出したい」と力を込める。



◀高度救命救急センターで学生に指導する名倉教授(左から3人目)



# 名倉弘哲

医歯薬学総合研究科 薬学系 教授

- NAKURA Hironori (48歳)
- ▶1964年 東京都大田区生まれ
  - ▶1987年 昭和大薬学部 卒業
  - ▶1987年 北海道大学薬学部 研究生
  - ▶1992年 昭和大薬学部臨床薬学教室 研究生
  - ▶1994年 聖マリアンナ医科大学医学部薬理学教室 助手
  - ▶1998年 通産省(現・経産省) 博士研究員として東京工業大学生命理工学部勤務
  - ▶2000年 昭和大薬学部薬剤部にて初めて薬剤師として勤務
  - ▶2007年 岡山大学医療教育統合開発センター 准教授
  - ▶2012年 岡山大学大学院医歯薬学総合研究科救急薬学分野 准教授
  - ▶2012年 同分野 教授